

「2012」★★★★

2009（平成21）年11月22日鑑賞<梅田ピカデリー>

監督・脚本・製作総指揮：ローランド・エメリッヒ
ジャクソン・カーティス（SF作家、リムジンの運転手）／ジョン・キューザック
エイドリアン・ヘルムズリー（大統領の科学顧問、地質学者）／キウエテル・イジョフォー
ケイト（ジャクソンの元妻）／アマンダ・ピート
カール・アンハイザー（アメリカ合衆国大統領主席補佐官）／オリヴァー・プラット
ローラ・ウィルソン（大統領の娘）／タンディ・ニュートン
トーマス・ウィルソン（アメリカ合衆国大統領）／ダニー・グローヴァー
チャーリー・フロスト（謎の男）／ウディ・ハレルソン
ユーリ・カルボフ（ロシア系米国人の実業家、元ボクサー）／ズラッコ・ブリッチ
2009年・アメリカ映画・158分
配給／ソニー・ピクチャーズエンタテインメント

<究極の、そして考えさせられるディザスター映画が登場！>

『インデペンデンス・デイ』（96年）、『デイ・アフター・トゥモロー』（04年）という2本のディザスター映画で有名なドイツ人監督ローランド・エメリッヒによる究極の、そして考えさせられるディザスター映画がここに登場！ディザスターとは災害のことで、ディザスター映画とは災害をモチーフにした映画。
そんなディザスター映画はミミ・レダー監督の『ディープ・インパクト』（98年）、マイケル・ベイ監督の『アルマゲドン』（98年）、ジョン・アミエル監督の『ザ・コア』（03年）、M・ナイト・シャマラン監督の『ハプニング』（08年）、アレックス・プロヤス監督の『ノウイング』（09年）等々面白いものが多く、それぞれ考えさせられる。
そんな中、本作が「究極の」ディザスター映画だというのは、気象の激変で北半球が一気に氷河期に入るという大異変を映像化した『デイ・アフター・トゥモロー』を超えて、惑星の直列により太陽の活動が活発化し、強い放射線によって地球の核が熱せられ、大陸全体を洪水が襲うというニュートリノ現象を描いた映画だから。次に、本作が「考えさせられる」ディザスター映画だというのは、そんな人類滅亡の秘密を知っている者代表として地質学者で大統領の科学顧問であるエイドリアン・ヘルムズリー（キウエテル・イジョフォー）と、知らない者代表としてSF作家でリムジンの運転手であるジャクソン・カーティス（ジョン・キューザック）を対比させながら登場させ、それぞれの立場から人類滅亡の日を描いたからだ。

<なぜ、2012年12月21日が人類滅亡の日？>

幸いなことに「ノストラダムスの大予言」として大きな話題を呼んだ1999年7月は何の天変地異も起こらず、地球は無事に存続することができた。それに代わって浮上した（？）2012年12月21日という「人類滅亡の日」は、マヤ文明の5200年弱周期の「長期計算法」にもとづいて計算しているものらしいから、興味ある人はしっかり勉強を。
私たち日本人にとってマヤ文明はかなり遠い存在だが、メル・ギブソンが監督した『アポカリプト』（06年）をみると、16世紀はじめにスペインによって征服されるまでマヤ文明は非常に高度な文明を誇っていたことがよくわかる。そんなマヤ文明が科学的に予言したことだから、その的中率は高いはず・・・。

<なぜノアの方舟が？米中融合の姿にビックリ>

人類滅亡の日を予測する説は多い。古くは旧約聖書にも「ノアの方舟」のお話があるから、既に人類は一度は滅亡を経験済み？私が本作の設定で面白いと思ったのは、第1に前述したマヤ文明の予言と旧約聖書のノアの方舟の話を結びつけたこと。そして第2に、2009年11月のオバマ大統領の中国訪問によって鮮明となった、米中融合の姿を方舟づくりに活かしたことだ。もし五体陸が大洪水に襲われ、種の保存のために巨大な現代版ノアの方舟を短期間で造らなければならないとしたら、それはどこで造るのが最適？それは、短期間で労働力を集中できる中国に決まっている。しかも、洪水に襲われるのが1番遅いのは、ヒマラヤ山脈に近いチベット自治区だ。
そんな発想によって、本作はハリウッド映画であるにもかかわらず、後半はチベット自治区が重要な舞台として登場する。さらに、巨大な方舟を指揮する艦長は、J・J・エイブラムス監督の『スター・トレック』（09年）では到底考えられない中国人だ。
そんなローランド・エメリッヒ監督の考え方と本作における中国重視の姿勢について、2009年11月24日付読売新聞は「人類救った秘密基地『中国しか作れなかった』」「皮肉？賛美？米映画で論争」という見出しで賛否両論を紹介している。さて、あなたは本作の方舟づくりにみる米中融合の姿をどう評価？

<誰を救う？誰を見捨てる？それは哲学？それとも経済原理？>

旧約聖書ではノアの方舟に誰を乗せるか、具体的には人間以外にどんな動物を乗せるかについては、神様の命令があったからある意味楽だった。しかし、現代版ノアの方舟に誰を乗せ、誰を乗せないか、つまり誰を救い、誰を見捨てるのかは極めて難しい問題。数年後に迫った人類滅亡の日を知ったアメリカ大統領トーマス・ウィルソン（ダニー・グローヴァー）をはじめ各国首脳は、巨大なノアの方舟建設とその乗船者を「ある基準」で決定しようだが、さてその「基準」とは？合衆国大統領をはじめ各国首脳やその家族そしてエイドリアンや合衆国大統領の主席補佐官であるカール・アンハイザー（オリヴァー・プラット）など、「ノアの方舟作戦」＝「チョーミン計画」の指導者や作戦従事者の乗船は当然だが、その他は？
本作にはロシア系米国人のユーリ（ズラッコ・ブリッチ）やその家族が登場するが、彼らは作戦に必要なから乗船切符を与えられたのではなく、巨大な方舟の建設費用に充てるための経済力の対価として与えられたもの。ちなみに、ユーリのチケット購入代金は1人10億ユーロ（約1300億円）という途方もない金額だから、絶頂期のホリエモンこと堀江貴文がロシアや中国の富裕層でなければその購入は到底ムリ？誰を救い誰を見捨てるのかというテーマは本来哲学の分野だが、その中にもそんな経済原理が混入しているところが興味深い。それはある意味で当然だが、逆に金持ち優遇政策はけしからんという考えも当然成り立つもの。さて、民主党の鳩山由紀夫総理の理念である「友愛の精神」によれば、その基準はどうなるのだろうか？

<後半は、エイドリアンとカールの対立を軸に>

映画の中盤は、当然方舟に乗船し、極端に縮小された「人類」の指揮を執り続けるとみられていた合衆国大統領トーマス・ウィルソンの決断が一つの見どころ。娘のローラ・ウィルソン（タンディ・ニュートン）だけを方舟に乗せ、自らは国民と共に運命に従うという途を選択した大統領の心意気を、少なくとも日本国の総理大臣は見習ってもらいたいものだ。
他方、後半のストーリー展開の軸になるのは、エイドリアンとカールの対決。徹底した現実主義者、合理主義者として、誰を救う？誰を見捨てる？の基準を明確に設定して疑わない主席補佐官のカールに対して、科学者であるエイドリアンが、後半それを疑い始めたのは一体なぜ？巨大な方舟といえども定員があるのは当然だし、そのプラチナ乗船券の入手方法については、各国首脳の協議によって厳格な基準が設定されたはず。ところが、方舟に乗ろうと群がる多くの人々を見て、エイドリアンが「ゲートを開放すべき」と主張し始めたのはなぜ？ひょっとして、それは誤った人情論？
どちらが正しいのかという判断は実に難しいが、少なくともエイドリアンとカールの対立に見る論点の整理はしっかりしておく必要がある。そしてそれは、明日にも日本を襲うかもしれない巨大地震や台風に対する危機管理マニュアルとして文章化し、国民に周知徹底させておかなければならないはずだ。

<ホントは、こんなハッピーエンドはナンセンス？>

過去のディザスター映画は多大な犠牲を払いながら最後には危機が回避されるというパターンが多かったが、究極のディザスター映画と言われる本作では、ついに人類は滅亡するの？そう考えている人には、本作が描くハッピーエンドには納得できないかもしれない。
本作の一方の主人公であるジャクソンのハラハラドキドキの冒険は本作全編を通じた見どころの一つで、それはそれで面白い。また、故障した方舟を直すために最後に見せるジャクソンの犠牲的な行動もいかにもアメリカンヒーロー的な見せ場で面白い。それによって方舟は陸地として残るエベレストへの衝突を避けることができたのだから、まさにジャクソンは方舟の命の恩人。しかして、大洪水となった地球上に漂う方舟の運命は？そして方舟に乗った人々の運命は？
そんな心配が山ほど沸き上がってくるにもかかわらず、また本作が究極のディザスター映画であるにもかかわらず、本作が描くハッピーエンドはちと非現実的。だって、あれだけの人間を方舟に収容してしまったら、その食事は？その秩序維持は？まあ、そんな現実を言い始めたらこの映画は成り立たないが、ホントはこんなハッピーエンドはナンセンス？